「日々の理科」（第 1123 号） 2017（H29),-8,-3

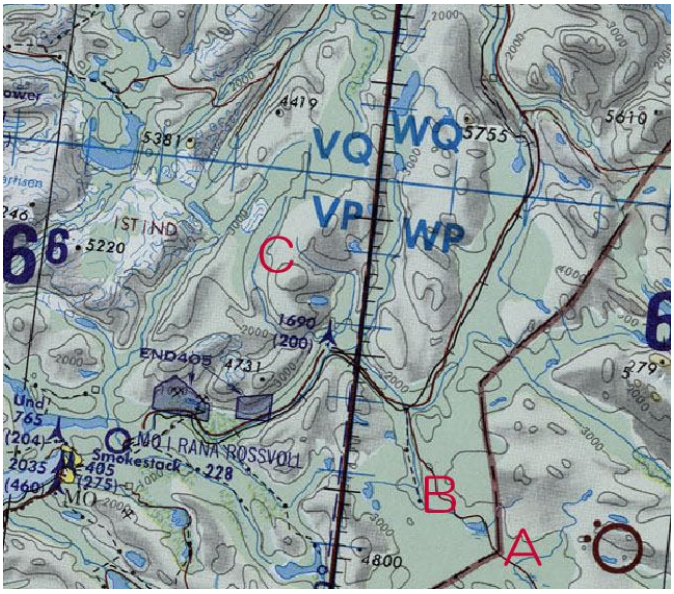
「北極圏旅行記 2017 夏（10)」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

～7 / 28・29 ノードネスのキャンプ場～

スウェーデンからノルウェー側に入ると、景色が一変する。樹木がほとんどない岩石地帯から、ほんの十分ほど走っただけで、針葉樹林帯に入った。道の向こうに、氷食地形の鋭い岩峰が見える。まるでスイスアルプスを走っているようだった。

氷河の削り残しの山のようで、マッターホーンに似ている。山の名称はわからなかったが、国道からはしばらくこの山が見えていた。



手元の航空地図（スカンジナビア半島北部図福）で見ると、どうやらＣのピークのようである。Ａがスウェーデンとノルウェーの国境、Ｂが写真の撮影地点である。航空地図は陰影がはっきりしているので、直感的に地形を読み取りやすい。図福の中の６ $_6$ という数字は、その範囲（正方形）の地形から割り出した「最低飛行高度」を表わす。６ $_6$ の場合は、6600 フィート（約 2010 メートル）を意味する。このエリアを飛行する航空機は、高度 6600 フィート以上を維持していれば、地面（山）にぶつかる心配はないということである。しかし、それでもこうした山岳地帯を飛ぶ航空機は、操縦が難しいだろう。

右側には巨大な岩山が見えた。まるで地球最大の岩をそのまま置いたような山だ。山頂付近の氷河（あるいは万年雪）から何本も滝が落ちている。落差は裕に 300 メートル以上あるだろう。残念ながら道が非常に細く、対向車とのすれ違いも難しい道路なので、車を停めてゆっくり見ることができなかった。

この道もトンネル工事をしていた。硬い岩盤を掘り進むので、時間がかかるだろうが、開通するとこの景色も見られなくなってしまう。

今日の宿泊地「ノードネス・キャンプ場」に到着した。国境から１時間ほどだった。レセプションのある建物は、屋根が草やコケで覆われている。これは、屋

根にあえて土をのせて、植物を生えさせる、このあたりの伝統的な屋根の作り方だそうだ。

屋根にはララローセン（ヤナギラン）がびっしりと花を咲かせていた。驚いたことに、小さな樹木まで生えていた。

これが宿泊した Stugo（キャビン）。狭いが機能的で、特にテラスでの食事が気持ちよかった。このタイプのほかにも、据え置き型のキャンピングカー付きのタイプもあり、好みに応じて選べるのが楽しい。

キャンプの裏側は、すぐ川になっている。キャンプ場に来るお客さんの中にも、釣りの道具を持った人がたくさんいた。釣り竿を長くしたまま、車のフロントウィンドウに設置する道具を、皆装着していた。

こんな魚が釣れるらしい。魚には詳しくないし、説明文がノルウェー語だったのでよくわからなかったが、サケの仲間はいるようだ。

キャンプ場の裏手にも回ってみた。ここは確かにノルウェーの北極圏なのだが、どう見ても群馬県の長野原町あたりの農道にしか見えない。家の造りも日本の家屋に似たものがあり、何となく郷愁を覚えた。